関連学会印象記

“第4回国際集中治療医学会”

今　井　孝　祐*

第4回国際集中治療医学会は，1985年6月24日から6月28日の5日間にわたりイスラエル，イエルサレムの Convention Center 及び隣接の Hilton Hotel を会場として行なわれた．

イスラエルという近隣のヨーロッパ地域を除いては到着するのにかなり不便な場所であるため，日本からは30名弱の出席者，学会事務局発行の参加者一覧によると35ケ国から1,000人弱の参加者であり同伴者を含めて1,000人程度の規模かと思われた．特記すべきこととしては第5回国際集中治療医学会が4年後に京都で開催されることに決定され，学会最終のプログラムの終りに名市大青地教授が4年後に京都で会いましょうと発言されて会を閉じられ盛大な拍手を受けられたことである．

国際学会は，学会の主題である学術講演の内容，質，それらをいかに多国籍，多国語の参加者に理解しやすく参加しやすいようにプログラムを組むか，またそのための学会場の設備，通訳，レイアウトの工夫がどうかという学術プログラムに関する問題，多国籍の参加者の交流，母国を遠く離れての滞在に対する慰労，主催国の文化の紹介などを目的とする Social Program がうまく計画，運営されているか，などが主要な問題であろうと私は考えており，以下この学会に参加した私なりのこれらの点に関する感想を記し学会印象記としたい．

国際学会の常として朝8：00より9：30まで大ホールで Plenary lecture が3人の演者により30分づつ行なわれた．内容は呼吸不全，ショック，心機能，蘇生，腎機能，体液バランス，外傷などICUにて日常的に直面する問題であり，演者も論文でなじみの方が大部分であった．Morning lecture の後は各 topics 毎に3～4人づつの演者による講演，約35の topics にわたるワークショップ，free paper のなかから或る主題に関してピックアップした5～6題の口演による free commuication，これらと平行して1つの会場で連続して教育講演が行なわれた。朝の Plenary lecture とその後の分散した会場での Session は内容的には特に差がなく，或る主題に関して要領よく情報がえられる形式になっていた．私が主に参加したショック，呼吸に関する部門では，最新の Original な仕事というよりは総説的なものが主であり，知識の整理，現状でのレベルの把握に役立った．各会場には特に会場からの討論用のマイクも用意されておらず，時間も比較的ルーズであり，英語以外から英語への通訳は私の英語力の限界もあるが聞き取りにくく，日本のスムーズな学会運営に慣れた者にとってはその運営はやや雑に感じられた．ワークショップは50～60人程収容の小じんまりした会場で5～6人の演者を中心に主題に関して発表，会場からの質問をおりまぜて討論を行うという形式であり，小グループによる討論効果をねらったと思われるが，こうしたワークショップの数が比較的多かったのが今回の学会の1つの特徴かと思われる．

私は右心機能及び MOF に関するものに参加したがいづれも興味をもっている主題だけにえるものが多く，また MOF に関するものは名市大の青地教授が司会をなさり盛りあがったものであった。今回は教育講演は聞く機会がなかったが，日本からは山口大武下教授，女子医大関口教授，日医大西邑教授がそれぞれ専門の分野を担当されて

*群馬大学医学部附属病院集中治療部

Presented by Medical*Online

学会に寄与された.

学会最終日最後のプログラムは Limitting therapy to the hopelessly ill patients という題であり，ともすれば日本では軽視されがちなこうした主題が大きくとりあげられ，日本からは名市大の青地教授が問題提起された。この外にも講演のなかに ICU における予後や治療の限界に関するものが幾つかあり，ICU における科学的なリサーチは勿論のこと，実際に ICU においてどの程度の患者を治療することによりどの程度救命率，予後があがっているのか，また教育面，研究面における ICU の役割，これらをはっきりした数字，普偏性のある形で示す必要性を改めて痛感した．そうした報告のなかにあって米国ジョージワシントン大学の WA Knaus は米国の主要な ICU 間の成績を APACH II にて比較，成績の悪い施設の特徴として常勤の指導者がおらず，看護婦等 ICU スタッフの関係がうまくいっておらず，アカデミックな姿勢がないなどの点をあげており，ICU 運営上示唆に富むものであった．日本ではこうした研究が殆どないが，国内各施設の交流を活発にして長所を拾い合い，日本独自の優れた ICU 運営形態を作り上げていく必要性があるのではなかろうか。

Freepaper の発表は Poster 展示が大部分であった。学会の中心はあくまでも free paper における研究者相互の情報の交換と討論にあるべきであり，Poster 展示は学会の中心でできる限り長時間有益な討論が行いうる形で運営されるべきと私は考えている．そのような観点からは本学会の Poster 展示は種々機械展示により隅みっこに追いやられた感がした．またその方式は発表者が任意の時間を指定してその時間帯に質問を受け，展示は1日中しておくという形式をとっていた。私が興味をもっている問題に関する幾つかの興味深い発表があったが，指定の時間帯に発表者がいなかったり，限られた時間内に見きらなかったりの問題点があった．日本や他の学会で行なわれている司会者をたてての Poster 討論は研究者の意見の交換として非常に優れたものと思われるが，その点で本学会はやや不満足感が残った．

さらに Poster space, Abstract ともに用意してあるのに展示がなされていない空欄も幾つか目立ち，種々事情はあろうが主催者に対して失礼と思われる．剰送費，期日等困難な問題はあろうが，free paper の Abstract だけでも何とか事前に手にはいらないものかと感じるのは私だけであろうか．

Social events は 6月23日（学会前日），ヒルトンホテルの1室での Japan night の開催で始まった．聖ロカ病院五十嵐先生の司会により京都国際会議場の放映をまじえ50名以上の参加者がえられ盛大に行なわれた．次期開催地としての日本立候補の情報提供の場として成功したこの話を後程受けたまわった．

また同日21：00よりは Conentiovn Ceneter で Get-together party が行なわれたが，食事，飯み物にワーと群らがるのは万国共通の現象であることを再認識した．多人数，多民族の集りを満足させる食物，飯み物を経済的制約のなかで用意するのは大変なことと思われるが，パーティーの食事内容は Japan night のそれとは差が歴然であった．

学会当日の夜には Scopus 山にあるヘブライ大学の屋外円形劇場で，イスラエルの C Herzog 大統領の会挨のあとイエルサレムオーケストラの演奏会が行なわれた．日中の暑さとはうって変った寒風に参加者一同震え上がった．学会3日目夜にはイスラエルミュージアムの屋外劇場でイスラエル伝統民謡と踊り，また古文書等が展示されているイスラエルミュージアムが参加者のため深夜まで開放され感銘を受けた．学会第4日夜にはイエルサレムの格式高い King David Hotel の庭で Farewell Banquet が行なわれたが，これらの公式行事はすべて屋外であり絶対に雨が降らないという土地ならではであった．Farewell party の最後には，King Herod Family Cave の小高い丘の上で子供達のコーラスによる世界各国語による各国の歌が披露され，花火があがるという演出も用意されていた．この外に学会の前後に事務局が用意した pre and post congress tour があり，私はガリー地方を回るPost congress tour に参加，キブツの guest house に泊まりイスラエル北部を見る機会にめぐまれ，イスラエルの困難な国造り，数々の遺跡，美しい地中海浴岸を垣間見ることができた．このように Social Program は決っして華美ではないがよく準備，組織されているとの印象を受けた。

Presented by Medical*Online